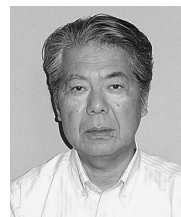




《2015年度日本天文学会 天体発見功労賞》

新天体の出会いは支えられて

西村 栄 男



〒436-0086 静岡県掛川市宮脇1丁目6-20

日本天文学会，2016年の春季定期総会で「新星いて座V5667, V5850天体発見功労賞」をいただきありがとうございました。この賞は新天体を探すアマチュアにとって大きな励みであり，表彰式の折には多くの皆様と交流ができて大きな力をいただいております。重ねて御礼申し上げます。2010年に一度投稿させていただきましたのでご依頼をお断りしようかと思いましたが，お力添えをいただいている方々へのお礼と，微弱なアマチュアが日頃このような思いで，新しい星を探しているということをお伝えできればと恥ずかしながら投稿させていただきました。

1. 星とのめぐり合い

天竜川は諏訪湖を源に，多くの溪谷に揉まれ，またいくつものダムにせき止められながら浜松市の東で太平洋にそそぐ。その最大の支流が清流として知られる気田川である。その川は浜松市天竜区の東側の広大な森林地帯の水を集めている。その東の最奥が私の出生地だ。

赤石山脈の南部に位置し，南と北側に千メートル級の急峻な山に挟まれた谷間の小さな村である。大井川との分水嶺に近く，人も文化も大井川地域の影響を大きく受けている。

私が物心ついた昭和30年代は街灯一つなく，夜な夜な輝く星たちは原始の姿を見せていた。

みんな貧しかったその頃は，山河で捕れる魚や地蜂・山芋等は生活の中では欠かせないものであった。それらを取得する目的で父と一緒に夜の山道をよく歩いたものである。何歳の頃だったのかは覚えていないが，大きなモミの木の下で休んでいたときのことである。足元に木々の枝から零れ落ちた星が影を落としているではないか。父に尋ねた「星の光ってこんなに明るいんだね」と。その時だったと記憶しているが，暗い星を見よう

とするとき少し目をそらすことを教えられた。

あの時のモミの木はどうなったであろう，半世紀ぶりに尋ねてみた，すると幹の部分の数メートル残して朽ち果てていた。星の光を瞬かせていた枝の数々はすでに大地に還って歳月の流れを改めて感じさせられた。

それ以来，星の光の美しさ，不思議さを知った私は生活の中で宇宙や星のことを思い考えるようになっていった。

中学生のとき，19歳の池谷さんがすい星を発見したことで，自分も仕事をしながら新しい星を探そうと決意した。私の星探しは10センチの反射望遠鏡で光学系以外全自作の粗末な機材ですい星探しから始まった。16歳のときであった。

低空の全く見えない谷間，真冬の冷え込みは川をすべて凍らせるほどの厳しさがああり，早朝の搜索を終えるころには寒さで関節が動かないこともあった。

そのような姿を見て，母は私より早く起きて新聞紙，細い木の枝と順次燃やして最後に木炭に火をつけ，暖をとれるようにして早朝の搜索を応援してくれた。

私の両親は何も生活にプラスにならない星探しに対して物心両面で協力してくれた。

今、その両親は90歳という高齢であるが新星を見つけるたびに喜んでくれて、私の健康をこのほか気にしてくれている。ありがたいことである。

2. 私が発見に関わった星々

この表は多くの方に支えられて、私が半世紀にわたり新天体を求めてきた成果を初めてまとめたものである。

一つひとつの星に深い思いが浮かんでくる。

新しい星

番号	名前	発見日(UT)	位置	光度
1	C/1994N1	1994.7.5	03 59+70 10	9

新星

番号	名前	発見日(UT)	位置	光度
1	V0475 Sct	2003 08 25.58	18 49 37.62 - 09 33 50.3	8.4
2	V5114 Sgr	2004 03 15.82	18 19 32.29 - 28 35 35.7	9.4
3	V2361 Cyg	2005 02 10.85	20 09 19.05+39 48 52.9	9.7
4	V5115 Sgr	2005 03 28.78	18 16 58.96 - 25 56 38.9	8.7
5	V1188 Sco	2005 07 25.28	17 44 21.59 - 34 16 35.7	9.1
6	V2362 Cyg	2006 04 02.81	21 11 32.34+44 48 03.9	10.5
7	V1281 Sco	2007 02 19.86	16 56 59.35 - 35 21 50.2	9.3
8	V2615 Oph	2007 03 19.81	17 42 44.00 - 23 40 35.1	10.2
9	V2670 Oph	2008 05 25.69	17 39 50.93 - 23 50 00.9	10.3
10	V496 Sct	2009 10 08.37	18 43 45.65 - 07 36 41.5	8.8
11	V2673 Oph	2010 01 15.86	17 39 40.94 - 21 39 47.9	8.8
12	V2674 Oph	2010 02 18.85	17 26 32.19 - 28 49 36.3	9.4
13	V1311 Sco	2010 04 25.79	16 55 13.16 - 38 03 46.9	8.6
14	V5587 Sgr	2011 01 25.86	17 47 46.33 - 23 35 13.1	11.2
15	V2676 Oph	2012 03 25.79	17 26 07.08 - 25 51 45.4	12.1
16	V5592 Sgr	2012 07 07.50	18 20 27.26 - 27 44 26.3	7.8
17	Sgr 2015 No. 1	2015 02 12.88	18 14 25.14 - 25 54 34.3	10.9
18	Sgr 2015 No. 4	2015 10 31.38	18 22 59.25 - 19 14 14.8	11.5
19	Sco 2016	2016 06 10.63	17 38 19.27 - 37 25 07.7	12.4

わい新星

番号	星座名	発見日(UT)	位置	光度
1	Psc	2010 12 29.40	23 04 25.83+06 25 45.8	11.5
2	Dra	2011 09 05.53	18 42 27.92+48 37 42.5	11.8
3	Her	2014 01 24.82	16 16 18.67+11 51 05.8	13.1
4	Ori	2014 03 05.48	06 00 09.85+14 26 15.2	13.5
5	Aql	2014 03 18.81	19 26 10.84 - 10 15 30.1	12.6
6	Oph	2014 04 11.75	17 14 42.55 - 29 43 48.1	10.7
7	Oph	2014 05 22.78	17 29 29.16+00 54 04.3	12.1
8	Ser	2014 12 20.87	16 05 47.99+24 05 31.0	12.6
9	Her	2015 01 23.85	17 50 02.88+20 22 26.4	12.2
10	Sgr	2015 02 27.84	17 45 37.68 - 17 56 25.3	12.4

フレア星 (未承認)

番号	星座名	発見日(UT)	位置	光度
1	Vul	2009 03 20.80	20 43 34.69+24 07 39.2	8.5

※数時間の急激な増光をとらえた画像を3名が撮影しており、多くの方にご尽力いただいたが未承認。

3. 愛犬との星探し

私の星探しは愛犬なしには語れない。最初の犬は子どもの強い希望で購入したシェルティ犬を「スマイル」と名づけた。いつの頃からか私の車に同乗してすい星探しに出掛けるようになった。

1994年7月6日早朝、30年間探し求めた新しい星との出会いのとき、私のそばに座って一部始終を見ていた。利口な犬であったが10年とは生きられなかった。

次の犬は貰い手がなく、保健所処分がささやかれていたのを見かねて貰い受けた。そのときは1個目の新星を探しても探しても見つからないときであった。縁起を担いで当時南米チリで新星発見で活躍していたリラー氏の名前をいただいて「リラー」と名づけた(図1)。中型犬であったが自然が好きで山登りや、星の撮影にいくのが楽しみの方であった。星の撮影中、飛行機や流れ星に反応して教えてくれたりして空にも興味があるようであった。

私の関与した多くの新星やわい新星の光と一緒に受け止めた。星の撮影はすべて遠征なので淋しい山中では本当に心強い相棒であった。

10歳を過ぎたころ体調に変化が出て急に元気がなくなってきたが、星の撮影だけは一緒に行き



図1 愛犬リラー(日本中で一番星空を見てきた犬かも)。



たい仕草を見せた。しかし2014年秋には後ろ足が完全に機能しなくなり、後ろ足をもち上げての毎日の散歩となっていった。

ほとんど寝たきりになってからのこと、いつも星の撮影にいていた小高い丘につれていったことがあった。突然元気に「ワン」と吠えて星を見にきていた頃を思い出しているようであった。

十数年苦楽を共にした愛犬との別れは2015年7月16日に訪れた。私の故郷の星が見える高台に葬ってあげることにした。土を掛けようとしたとき、ドラマのようなことが起こった。今まで降っていた小雨が急に傘の用がなさないくらいの豪雨となり、「リラー」が私と別れたくないと空に向かっての祈りが通じたかのようであった。次々に流れる涙は雨に流され、どれほど涙があふれ出たか自覚できないくらいであった。

今、その墓には誰が植えてくれたのか赤い花が爽やかな故郷の風に揺れている。

4. 新星の出会いと不思議な女性

新しい星との出会いに30年、新星との出会いに3年の歳月がかかった。どちらの出会いも自分としては劇的なものがあった。

すい星は雲に案内されて、新星は電線と重なり「ここにあるから見つけて！」と私に告げていた。新星は夏の銀河の中の小さな星座「たて座」であった。

何の挑戦でもよく言われるのが、一つの壁を破ると次々どうまくいくようになることがある。私の新星との出会いも同様で、それから次々に見つかり10個目の節目の出会いを迎えることになる。

2009年10月8日、新星の主な出現場所である夏の銀河の中心はすでに西空に沈み、毎年1個以上見つけてきた自分の勝手な記録も今年で途切れしてしまうのかと感じていたときのことであった。

仕事を終えて西に傾いた夏の銀河を撮影し、自宅で過去の画像とパソコンで照合し明るい新星らしき天体を見つけた。同時に携帯に電話が入って



図2 「幸運の女神」谷口直美さん（ご本人の了解済）。

きた。同じ職場に勤める女性、谷口直美（旧姓鈴木）さん（図2）からであった。彼女はほかの会社から中途で入社したばかりで、駐車場から職場まで200メートルくらい歩いて出勤する間に話をする機会があった。書道が同じ趣味で、私が新しい星を探していることに興味をもって話をして聞いてくれた方である。

何千年も宇宙を旅してきた光を受け止めたと同時に、音で私に連絡を届けてくれた偶然と、その星座が私の記念すべき1個目の新星と同じ「たて座」であった偶然とが重なった不思議な出会いに、その星を「直美さんの星」として自分の記録として残しておくことにした。

その翌年2010年、経験したことのないことが起こった。西空から東の低空に回った「たて座新星（直美さんの星）」と1月と2月に私が単独で見つけた2個の新星の三つの星が、早春の銀河に仲良く9等星で輝いてくれたことであった。

彼女とは仕事上で少しの関係と、早朝出勤で職

場の清掃を進んで行ってくれることに感謝する言葉をかけるくらいだったが、彼女を「幸運の女神」ではないかと勝手に思い、次々に幸運が訪れるのではという予感があった。しかし、彼女も年頃で2013年京都の前職場の方と結婚が決まった。京都での結婚式で祝辞を依頼され「たて座新星（直美さんの星）」のことで、彼女の仕事を中心にスピーチをさせていただいた。その後、なかなか新星が見つからず、見つかるのはわい新星ばかりというおかしな現象が続くことになり、私の目標としていた新星の毎年1個以上の出会いは途切れてしまった。

結婚から1年3カ月後、6月1日彼女に可愛い女の子が誕生した。何ということか私と同じ誕生日であった。世の中には不思議なこともあるものである。今、彼女は子育てをしながら、書道作品と便箋に万年筆で書かれた近況を毎月送ってきている。

彼女には人生の小さな出来事であったかもしれないが、星を探す私に大きな勇気を与えてくれたことを心の隅に留めておいてくれればと願っている（この文について彼女の同意をいただいている）。

5. 多くの方に助けられて

半世紀も新しい星を探しているといろいろなことが思い出される。特に眼視ですい星を探していた頃には、もう少し視野を動かせば新しい星に出会っただろうと思われることが何回かあったが、逆に新星は偶然に巡り会えたものが多い。

新しい星との出会いは、続けていけば必ずチャンスはやってくる。そしてそのチャンスを自分のものにするように日頃から準備することが大切だと思っている。

しかし、アマチュアは仕事や家庭など日頃のいろいろな出来事で気持ちが左右されてしまう。特に早朝の起床は眠気との戦いで強い意志が必要だ。最初の星を見つけるまでの気持ちをいかに維

持するかが自分の成長ではないだろうか。

続けることにとって、身近に居る妻や家族は大きな存在である。私は妻から真面目に星の趣味についての意見を聞いたことがない。よき理解者というより「諦めている」と解釈したほうが正しいし、そのほうが気兼ねなくやれるのかもしれない。私にも好きな星ばかりを追いかける後ろめたさもあり、星の見えない夜は家事などをなるべく協力するように努めている。毎夜気持ちよく星の撮影に出掛けられる雰囲気づくりも大きな要素であろう。

私の場合、職場の人たちの理解や協力にも勇気づけられている。温かい手袋や懐中電灯を贈呈してくれたり、予定していなかった収入が入ったのでいくらかのお金を「機材の購入に役立てて」と渡してくれるありがたい方もあった。

また、全国の星仲間の中には、新天体を探す好敵手に「武器を贈る」ような行為をさせていただける方もあり、星好きの世界ならではの素晴らしさを感じている。日本天文学会総会の表彰式前後のプロ・アマの交流は特に貴重な意見をいただけるチャンスである。

したがって多くの新しい星との出会いは自分の力だけではないことがいつも頭の中から離れない。

ヒト以外では、私の庭に住んでいるクモだ。夏は巣にかかる昆虫が多く太っているが、秋の深まりと共に飛び交う虫が少なくなり日々痩せていってしまう。晩秋にはクモは巣を修復する力もなくなり、到底捉えることができないであろう壊れた巣の隅でじっとして獲物がかかるのを待っている。その姿は宇宙から届く新しい光を待つ私の姿と似ている。じっくり待たずにいろいろなことに迷いもがく私はクモ以下の生物かもしれない。

6. 遠征撮影（搜索）について

私は20代の前半に深い谷間の山村から、50キロほど南の掛川市に移り住んだ。光害で肉眼で見える星の数は極端に減少したが、広い視界と晴天



図3 私の東天の撮影場所（自宅から15分）。

率の高さに驚いた。でも自宅からは視界と光害で星を撮影しようという気にもなれないことから、やむなく車に機材を積み込んで郊外の茶畑に遠征して星を探すことになった。車で15分も走れば天の川も容易に見られる環境で（図3）、雲が多くても晴れ間を探して走り回れば運よく撮影できることもある。架台の組立て時間のロスや、撮影からチェックまでの時間のロス、地獄のような寒風の吹きさらしは辛いですが、季節感覚を味わうことのできる遠征撮影はこれからも続きそうである。

自宅や観測室から搜索できる方は幸せと思う反面、遠征搜索も少しは有利なことがあると信じている。

7. あとがき

取り止めのないことを長々と綴ってしまったが、新しい星を見つけることは10代からずっと

もっていた夢で、一日たりとも頭から離れたことはない。

仕事や人間関係の悩みをひとときでも忘れさせてくれ、生涯続けられる趣味を見つけられたことに、この頃感謝の気持ちをもてるようになってきた。

今は新星探しが主になっているが、時間に余裕のあるときはすい星を探している。しかし、すい星を見つけることは本当に難しいことであろう。

すい星を眼視で探していた頃には、新星なんて面白くないと思っていたが、入り込むと人類が経験したことのない星が見つかる可能性があったり、アマチュアが見つけた新星を人工衛星が観測してくれたり、奥が深くすばらしい世界があることを知った。また、わい新星については深く研究されている方々が論文の片隅に私の名前を入れてくださり、この上ない喜びを感じている。

しかし、すい星への思いは強く私の気持ちの中にある。出会ったときの言葉に表せない感動と、その後の運行と光度変化など、すい星ならではの魅力がある。

これからもご指導いただいた方々に感謝しながら、いつまでもすい星を探し始めた少年の頃の気持ちをもち続けたいものである。

—「大地に還るその日まで、

幼い男のままだがいい」—